

## 1 誤解と偏見の中でウブ声を.....

### 子どもたちの織り成すエピソードの数々

「歌詞を口頭で教えようとしたり、話し合いのなかで様々な意見が出たりすると、すぐ字で書いて欲しいと園児に要求される」(北海道苫小牧市・駒沢苫小牧幼稚園)

「漢字でどう書くの? という問いがひんばんに出る。親よりも早く起きて朝刊を取りに行き、拾い読みをする子もいる」(仙台市・東陽幼稚園)

「買い物に連れて行くと、街にある看板の字をどう読むか質問したり、得意になって読んだりする。電車の中で、覚えていた宮沢賢治の有名な詩“雨ニモマケズ”を朗読して周りの乗客をびっくりさせた。卒園生の中に、教科書では抜すいしか載っていないのでつまらないといって、原作を買ってもらい、全編読んで楽しんでいる子どもがいる」(東京足立区・梅島幼稚園)

「知能検査のため来園されたある専門の先生が、検査後、結果を漢字で記入していたところ、園児がそれを読んでしまい、先生は大あわてをしてしまった。テレビに“劇場”などの字幕が出ると、すらすらと読み、たまたま一緒にいたお客が、その子は幼稚園児なのに、いったい小学校の何年生なのかと尋ねた」(茨城県勝田市・市毛フレンド保育園)

「園児が母親と一緒にある親戚の家に行ったが、たまたまその園児は風邪をひいていたので、そこで薬を飲んだ。ところが覚えていた諺“良薬は口に苦し”と飲んでものだから、親戚の人は目を白黒させて驚いた。四歳になる園児が教師に語ったこと『先生、お日様が雲の上にかくれたから“曇”なのね。お日様が青い空に来たから

“晴”なのね』」(茨城県那珂湊市・堀川保育園)

ここに書き出したものは、全国各地の実践園で、園児たちが様々に繰り広げているエピソードの、そのなかのほんの一部です。まだまだたくさんのエピソードがあるのです。

いずれも、ごく普通の子どもたちが、石井方式による漢字学習の実践を通して織り成した、日々の生活のなかのエピソードのひとつに過ぎません。

これらを特別視する必要は全くありませんし、そうすることが、子どもたちにとってはひょっとしたら“はた迷惑なくらい、ごく自然なできごと”なのです。

おそらく、企国でいま、こうしたエピソードをいくつも引き起こしながら、幼稚園、保育園で漢字を通して楽しく遊び、学習をしている子どもたちは数万人に及ぶでしょう。

### 実践園の第一号は昭和43年に

昭和43年の4月に、大阪市の小路幼稚園など数園が、全国に先駆けて石井方式を採用してから、昭和58年現在までの15年間に、その実践園は着実に増え続けて来ました。いまや、その数400に及ぶともいわれますが、このほかにも石井方式の“看板”を掲げることなく、しかし、実質的にそれを取り入れているところもかなりあるといわれ、それを含めれば、もっと多くの実践園があることでしょう。

ところで、前出の大阪の小路幼稚園を始め、そのころ、石井方式の採用に踏み切った先駆的な幼稚園たとえば、川崎市のひかり幼稚園、東京足立区の梅島幼稚園、金沢市のかわい幼稚園などは、当時、石井方式に対して、まだ理解が浅く、偏見すらあった状況のなか

で、根拠のない中傷をあびることもありながら、努力を積み重ねてきたともいえます。

ひかり幼稚園の園長である吉田尚弘先生は、そのあたりについてこう述懐しています。

「昭和43年の5月、石井先生に初めてお会いしましたが、そのころ、私は、実は一つの悩みを持っていたのです。というのは、園児は年長になると、ほとんどがひらがなの絵本を声をあげて読むのですが、本当に意味がわかって読んでいる子は大へん少ない。そこで、この子どもたちにもっと意味を理解しながら本を読めるようにさせるにはいったいどうしたら良いか、ということが私にとって最も気がかりな点だったわけです。

もちろん、石井先生にご教示いただき、石井方式を採用してからは、この悩みはすっかり消えました。ただし、当初は、父兄の多くが、『漢字を教えるなんてとんでもない』と反対するし、第一、教える側の教師も、『保育学校ではそんな教育は受けていないし、幼稚園において文字教育をすること自体が間違っている』と主張する人もあって、説得し、実施に移るまでは、なかなか大へんでした。教材も全くといっていいほどない状態でしたし……」

こうした経験は吉田先生に限らず、このころ、石井方式の実践に踏み切った幼稚園の関係者には、少なからず共通した苦勞だったといえるでしょう。

もちろん、今では、当時とくらべ、その普及、拡大において、隔世の感があるわけですが、それでも、父兄、そしてとくに新任の教師のなかには“漢字ショック”を受ける人がないわけではありません。けれども、「石井方式を一たん採用したら、まず中止する実践園はない」との定評通り、そういう先生方が抱くのは“食わず嫌い”であるがゆえの、

一時的な不満であり反対の気持ちなのですから、実際に、自分の目で見、あるいは自らの実践が子どもたちにもたらすすばらしい効果を知った途端、一転して石井方式に高い評価を与えることになるというわけです。

ちなみに、石井方式と初めて出会ったさいの当惑から、やがて短期間でそのすばらしさを理解するまでの“心の変化”を、幼稚園に新任した先生の感想文から少し紹介してみましょ。ここでは、昭和44年の10月から石井方式を導入している梅島幼稚園に、58年の春、教師として新任した二人の方に書いてもらったものから引用してみます。

### A 先生の感想

「“幼稚園で漢字を教える” この言葉を聞いて驚かない人は余りいないと思います。幼稚園の先生になろうと、幼児教育を志す人なら余計にそうか唇知れません。

私も、もちろん驚きました。いいえ、驚くというよりちょっと嫌な感じさえしました。それは石井先生の“漢字で教える”というお話を聞いたからといって、すぐに消えるというものではありませんでした。ただ、この二か月余り、子どもたちを見ていて感じることは、漢字に対して“むずかしい”とか“嫌だ”と思っているようには見えないことです。それどころか“もっと知りたい、覚えたい”という意欲を持っていることに驚かされる毎日です。

また、とくに感じることは、石井先生のおっしゃる“漢字で保育する”ということの大切さです。保育の中で、漢字が、漢字という特殊なもの

として浮いてしまわず、日常使う言葉と同じように生活に密着したものであってこそ、生きるものなのだと感じるのです。(後略)」

## B 先生の感想

「幼稚園で漢字学習を行なっているという話を、権島幼稚園に来るまで知らず、なぜ幼稚園で(漢字を)教えなければならないのか、疑問に思っていました。しかし石井先生や園長先生のお話を聞いて、不安や疑問も少しずつ自分なりに解決できました。それも自分で本当に子どもに教えてみて、子どもの顔の表情や反応を目のあたりに見て感じないと、わからないことで、今では、漢字を取り入れて行なっていることに自然に入っていけて、楽しくさえなってきました。(中略)

6月に入って“猫に小判”などの諺が出てくると、子どもたちは、猫がいたり、猫という漢字を見せただけで“猫に小判”と試してみたり、鉄棒の支柱にしがみついて降りると、“猿も木から落ちる”と試みます。お弁当の前の手洗いの時などのさいも、今までに覚えた諺をいいながら順番を待っていることもあります。(中略)

勤め始めて三か月がたち、漢字教育において、様々なことにぶつかり、とても勉強させられました。これからは、子どもたちのすばらしい芽を伸ばすためにも、今以上に努力し頑張っていきたいと思います」

全国の実践園で、とくに新任の先生方は、おそらく以上の様な経験を少なからず持ったことがあるかも知れません。いずれにしても、現在にして、まだ誤解を持つ向きがあるのですから、この15年の歴史のなかでは、先にあげたひかり幼稚園の吉田尚弘先生と似た体験をした人は多々あったものと思われま

## “パイオニア”井上文克園長の回想

石井方式実践の“パイオニア”として知られる大阪市・小路幼稚園の園長である井上文克先生もまた、こうした苦難の道を歩んできた一人ですが、ちょうど、実践を始めて4年目を迎えた昭和47年に、井上先生はその間を振り返って「幼稚園における漢字教育の歩み」と題した一文を雑誌「漢字漢文」の第十号に書いています。当時を知る格好の材料と思われるので、その一部をここに紹介してみましょう。

「漢字教育が初めて本格的に幼稚園に実施されるようになったのは、わずか4年前、昭和43年4月以降のことである。『石井方式漢字教育を開始すべき場は幼稚園である』ことを最初に提案し、これを初めて実践したのは、かく言う私の幼稚園、小路幼稚園であった。

私は、この年の1月、石井先生をお招きし、仲間の園長たちを集めて、漢字教育のお話を聞く会を開いた。その時、初めて聞いた『幼児にとっては、鳩は鳥よりも覚えやすく、鳥は九よりも覚えやすく、漢字はかなよりも覚えやすい』という先生のお話には、一同すっかり驚いたものである。

私の園では、それ以前から、先生方に漢字教育の実践を奨めていたが、全部の先生方からきびしい反撃を受けて、なかなか実践に移すどころではなかった。そこで、石井先生の来阪を機に、幼児の実際指導をしていただき、それを先生方に見学してもらうことにした。

それまでは知る由もなかった字画の複雑な漢字を、提出するはしからたちまちのうちに覚えて、すらすらと読みこなしていく幼児の姿に、先生方は何か奇術でも見ているような思いに駆られたようである。しかし、それで、漢字教育に対する今までの不信が、ともかくも半信半

疑の状態にまでは前進したように思われた。

『石井先生だから幼児があのように漢字を覚えるのであって、私たちにできるはずはない』と、恐らくそう思ったに違いない先生たちであったろうが、恐る恐るやってみると、結果は全く石井先生がやったのと変わらない。子どもたちはちゃんと漢字を覚えてくれるのである。

そこで先生方には大いなる喜びと共に、『よし、やってみよう』という意欲が自然と湧き起こって、積極的にこの教育に取り組む姿勢が作られていった次第である。(後略)』

結局、昭和43年からは、この小路幼稚園をはじめ、大阪の文化幼稚園、旭学園など数園の幼稚園で、漢字教育が開始されたわけですが、井上先生らの懸命な努力が効を奏し、その年のうちに、早くも実践園の集まりである幼年国語研究会が発足し、百園近くの実践園が参加するようになりました。

以後、阪神、和歌山地区から、関東、北陸、九州沖縄と、全国へ着実に実践園の数は増えていくようになったわけです。